所で採集したが，そこには，アキハギクのほかに，シロヨメナもあつたし，また，アキハギクとシロヨメナの中間形もあつて，その中間形は，さらに，三つほどの形に区別されるように見えた。それらの形は，おのおの小さな群れを作つて，離ればなれの場所に生えていたから，もとは，それぞれひとつ箇体から出たものかも知れない。鳥居喜一氏の近著，東三河植物資料 I (Aug. 1956) によると，東三河にも，アキハギクとシロヨメナの雑種が見出されるということである。田浦のアキハギクは，毛がやや少いが，房州には，もつと毛の多いものや，また，毛の少いものもあつて，毛の変化が目立ち，葉形その他にも変りがある。また，遠州や東三河の本場のアキハギクは，房州のとは形がちがう。三浦のは，もちろん，房州のに近く，それは，キヨスミギクの方なのである。わたくしは，アキハギクが，三浦にあることを，いままで，知らなかつたが，久内先生はとうの昔にごぞんじで，やはり，田浦で採集されたという。先生の採集地は，わたくしの場所からは，ほんのわずかばかり，隔つたところにあるらしい。先生の採集品は，東大にも博物館にもなかつた。なお，一昨年，アキハギクを採つた日 (Oct. 23, 1955) に，沼間の山で，シロヨメナの花のうす紫のを採つた。昨年また，同じ場所で，浅井康宏氏と一諸に採集した (Oct. 14, 1956)。それは，花色のほか，総苞片の先が濃く紫褐色に染まり，茎も深い紫いろをしていたが，それ以外には，三浦のシロヨメナとちがうところはなかつた。葉も深緑でつやつやしていた。東大の標本によると，武州刈寄のムラサキヤマシロギク *Aster leiophyllus* var. *purpurascens* Honda が同じ形のようであつた。しかし，サガミギク *Aster leiophyllus* var. *Harai* (Makino) Hara は，また別の形のように見えた。浅井氏は丹沢のサガミギクはちがうといわれた。沼間のは，シロヨメナの紫花品，シロヨメナといつても，とりわけ，三浦のシロヨメナのそれなのであつた。

□佐藤正已：有用植物分類学 pp. 530, ¥650, 養賢堂発行。

著者はボゴル植物園での一ヶ年の経験から，植物分類学者も大いに産業開発に協力すべきことを痛感し，それ以来，山形大学農学部で有用植物学を講じた傍この書を完成した。従つてアカデミックな分類学の書ではなく，各科やその他の分類群の特長などは殆ど省略し，分布域や主な属名などを挙げるに止め，専らその科，属に含まれる有用植物について形態，利用を述べている。方々にエピソード的な話があり，挿図も面白く，栽培法，天然紀念物などに関する文献引用もあつて，肩がこらずに勉強できるようになつている。陰花植物は僅かに 50 p. 分で，他は顕花植物である。(津　山)